

【主題】全校体制で臨む持続可能な開発学習の一実践の一実例

【副題】—「総合的な学習の時間」と教科との往還を意識して—

【学校・団体名】滋賀県草津市立老中学校

【役職名・氏名】校長 辻 大吾

1 はじめに

本校の研究では、以前より議論や意見交流を深めた探究的学習を進めてきたが、実践は途上であった。そこに、草津市教育委員会がこれまで試験的に取り組んできた「スクールESDくさつプロジェクト」¹⁾が、令和6年（2024年）度から市立全小中学校でESDの視点に立った特色ある学習活動として実践することとなり、第4期草津市教育振興基本計画に位置付けられた。本校ではこの方針に合わせ、総合的な学習の時間（以下「総合学習」）を基軸に、教科の学習を関連させて、社会全体や地球全体での持続可能な開発を意識した探究的学習のカリキュラムを設定し、実践することとした。

本稿の第一の目的は、この総合学習改善の実践報告である。しかし、総合学習に特化した校内研究は、裏を返せば、教員の意識が「持続可能な開発についての学習は総合学習でさえやっていればよい」、「探究的学習も総合学習でやっていればよい」といったものに陥る可能性がある。これでは、各教科の授業改善にはつながらない。国立教育政策研究所（2012）²⁾は、ESDを各教科で実践する際に留意すべき点を追究している。換言すれば、ESDは総合学習だけでなく他教科における実践も重視すべきということになる。そこで、本校では持続可能な開発をテーマとした総合学習に、他教科の学習も関連させるカリキュラムを設定した。

本稿の第二の目的として、その中でも第3学年において、総合学習だけでなく関連させた国語科、社会科における実践を報告し、生徒が持続可能な開発につながる資質・能力を身に付けたのか、成果を分析する。

2 令和6年度の取組の経緯

（1）3年間を見通したカリキュラムの設定

初めに、総合学習を、持続可能な開発に関する探究的学習を基軸としたカリキュラムに改善することを試みた。本校でこれまで実践してきた総合学習は単元間の一貫性がなく、環境学習や人権学習といったテーマごとに学習を重ねていた。そこで、カリキュラム・マネジメントの一環としてESDカレンダー（指導計画）を改訂した。単元を、持続可能な開発についての学習、

表1 令和6年度本校の総合学習の四つの領域

- A 持続可能な開発学習（探究的学習）
- B 老中祭の取組（探究的学習）
- C 進路学習
- D 人権学習

老中祭（文化祭・体育祭）の取組、進路学習、人権学習と大きく四つの領域に分け、領域内の単元に系統性を持たせ、学年とともに発展するようにした（表1）。

とくに持続可能な開発についての学習は、持続可能性に関わる「経済・社会・環境」の統合性を意識させるとともに、「自分で課題を立てる、整理・分析する、まとめ・表現（発信・行動）する」という学びのサイクルで行う探究的学習とした。また、老中祭に向けての学習では、学習成果の発信の場として、持続可能な開発についての学習で学んだことを、学年ごとに全校生徒や保護者、地域の方に向けて発表・行動する機会を設けた。

こうした方針を各学年の総合学習担当やESD担当、人権学習担当を中心に策定し、全校教員で共有した。各単元の学習構成においては、単元構想シートを作成し、単元の流れを学年教員で共有しやすくするとともに、次年度の同学年の教員にも引き継げるようとした。

（2）教科の授業

次に、総合学習における持続可能な開発についての学習と教科の学習とを関連させた構成を試みた。具体的には、ESDカレンダーの改訂の中で、各教科の担当者が総合学習における持続可能な開発についての学習に対して、自身の教科の学習で関連させることのできる単元を挙げた。持続可能な開発についての学習を総合学習で完結させず、教科の学習と往還させることで、授業者も持続可能な開発をテーマとして教材研究に取り組み、生徒はより学習を深めることができるようにになった。なお、総合学習と教科の学習との関係は一方向になることが多いため、教科の学習が総合学習の事前学習として、また事後学習として構成されてもかまわないとした。多教科にわたって学習が構成されるこ

とで総合学習と教科の学習との往還の機会が生じ、学びが深まることをねらった。

3 第3学年における実践事例

(1) 総合学習「ORプロジェクト」の実践

第3学年では、総合学習の改訂にあたり、持続可能な開発学習の一環で、10月から2月にかけて「Oikami Rediscovery Project（老上再発見プロジェクト）」（以下、「ORプロジェクト」）として、20時間の探究的学習を設定した（図1）。第3学年の後半期であり、中学校の中では学びを深めることができる時期である。前年度まではSDGs学習としての調べ学習だったものを、スクールESDくさつプロジェクトのうち、学びのサイクルを構築する探究的学習に改訂した。

学習活動	
1	「老上学区の現状を探ろう」 ・SDGsの復習 10時間
10時間	・学区の歴史（講演） ・野外調査に向けての準備 ・野外調査（学区） ・野外調査のふり返り ・学区のよさや魅力のまとめ
2	「よさや魅力を次世代につなげるために今自分にできることを考えよう」 ・グループごとに振興策案を練る 10時間 ・振興策の実践 ・プレゼンテーション ・ふり返り

国語科
夏草—『おくのほそ道』から—

社会科
地方自治

図1 総合学習「ORプロジェクト」の単元構成と国語科・社会科の学習との関連

第1次は2学期に実施し、学区の現状を探ることを目標とした。学区の良いところやすばらしいところに気づいていない生徒が多い実態がある。そこで、スクールESDくさつプロジェクトの地域の人材と協働で学習を進めるという方針に基づき、クラスごとに地域の方を講師として招聘し、学区の歴史を聞き取った。次に、野外調査に出かけ、聞き取りで知った学区の現状やよさについて、自身の目で確認させ、第2次の発信につなげるための情報として深めさせた（図2）。

第2次は3学期に実施し、第1次で捉えた学区のよさや魅力を発信するための振興策の検討を目標とした。グループごとに課題を立て、課題についての情報を整理・分析させた。まとめ・表現（発信・行動）する場面では、動画やパンフレット、ポスター、かるた作りなどに取り組み（図3）、学年集会において学年の生徒を対象とするほか、地域の方々も招いてプレゼンテー



図2 「ORプロジェクト」の様子



大きな銀杏の木の公園

矢橋公園には大きい銀杏の木があり、秋には銀杏がひらひらと空を舞っている風景が見られます。真っ青な空をバックに黄色の銀杏が落ちている様子はとても幻想的で、印象的でした。銀杏と一緒に写真を撮ったり、学生ならではの青春を感じることができます。矢橋公園には様々な遊具があり、その遊具に乗りながら美しい風景を楽しむこともできます。公園には銀杏以外にも赤や黄色の色とりどりの葉っぱが落ちたり、柿が落ちていたり、「秋」を感じました。季節を実感できる公園にぜひ立ち寄ってみてください。

私の「十年後に残したい風景」

図3 「ORプロジェクト」の生徒作品例

ションを行って老上学区のよさを発信した。併せて、生徒のデザインによる「ORプロジェクト」をシンボル化した缶バッヂを作成して生徒・地域に配布し、発信した。

(2) 国語科「夏草—『おくのほそ道』から—」の実践

第3学年の国語科では、「夏草—『おくのほそ道』から—」の単元を「ORプロジェクト」の第1次に合わせて構成した。松尾芭蕉は、『おくのほそ道』で、景観から得た印象を俳句や紀行文で表現している。これを「ORプロジェクト」に重ね、「ぼくのほそ路、わたしのわき路」と題して、生徒が老上学区の景観から得た



冬の道
マフラー直す
カーブミラー

下校するときに通る道にカーブミラーがあったのでいつも一緒に帰っている友達と撮りました。寒いから早く帰りたいはずなのに二人とも自転車を押して私の歩くペースに合わせてくれます。最近はカーブミラーを通り過ぎる前にお気に入りのマフラーが壊れていいか確認しています。夕日が出ているときに帰っているとカーブミラーに自分と友達と夕日が映っていてとても魅力的だなと思いました。
他にも帰る道にカーブミラーが何個もあってどこで撮るか悩んだけどこのカーブミラーから見える景色が一番好きだったのでこのカーブミラーにしました。

図4 国語科の取組における生徒作品例

現状やよさを自分事として捉えさせるために、俳句を詠ませた。具体的には、身近な地域である自分達の通学路に見える「心に残った風景」、「これから先もずっとあってほしい景色」をタブレット端末で写真に收め、感じたことを俳句にするとともに、その句に込めた思いを文にまとめ、スライドを作成させた（図4）。生徒が得た老上学区のよさや魅力を、総合学習の第2次における、よさや魅力を発信する振興策を考える学習に関連させた。

成果物を本校の廊下と校区にある2か所のまちづくりセンターに掲示し、広く地域に向けて発信させた。地域の方々が多数ご覧になり、生徒作品に共感されたり、生徒目線の発見に感動されたりと評判が良かった。

（3）社会科「地方自治」の実践

第3学年の社会科では、「ORプロジェクト」の第1次の進行に合わせ、学んだ老上学区の現状や課題を題材として、第6次草津市総合計画の基本構想に関する知識を加え、老上学区の未来（10年後）をよりよくするための提案をさせた。その際には、持続可能な開発の実現に向けた三つの側面である経済・社会・環境のバランスを意識して提案資料（図5）を作成して提出させ、意見交流させた。生徒が作成した提案を「ORプロジェクト」の第2次に活用することを試みた。

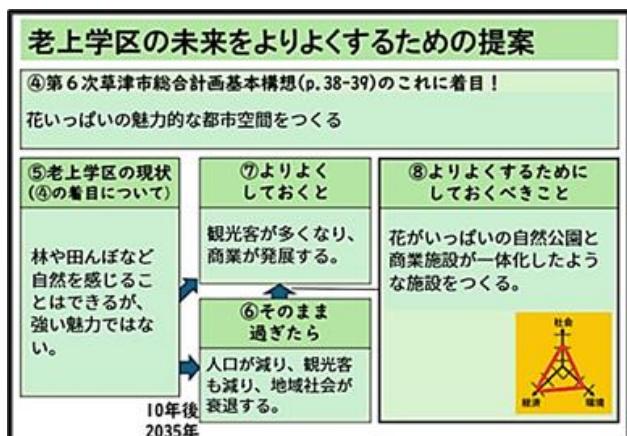


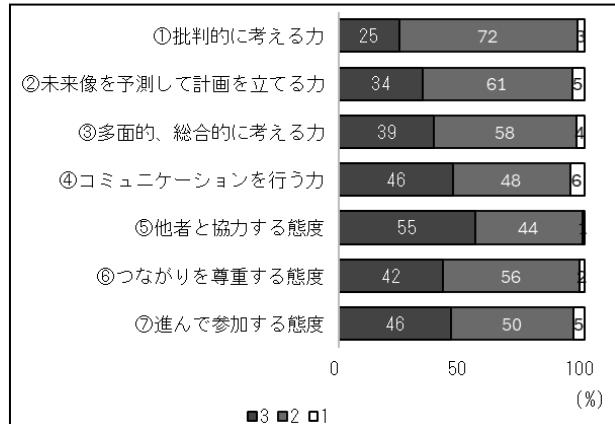
図5 社会科の取組における生徒作品例

4 成果の分析

こうした一連の学習の成果により、生徒がどのような資質・能力を身に付けたのか、生徒を対象に調査した二つのアンケートを基に、生徒の取組の状況や成果物と関連させて分析する。

（1）総合学習についてのアンケート

総合学習についてのアンケートは、第3学年の生徒を対象に、「ORプロジェクト」が第2次まで終了した



2025年1月実施、n=199、本校作成。

図6 第3学年の学習において生徒が身に付いたと実感しているESDに関する能力・態度

時期で、総合学習や教科の学習における効果を測りやすい令和7年（2025年）1月に実施した。国立教育政策研究所（2012、p.9）が例として挙げるESDの視点に立った学習指導で重視する資質・能力の7点について、生徒が身に付いたと実感した度合いについて3件法で尋ねた（図6）。

その結果、いずれの能力・態度について最も低い評価を選んだ生徒は少なく、ESDの視点に立った資質・能力が身に付いたと実感する生徒が多い結果となった。このことから、総合学習や教科の学習における取組の成果が認められた。とりわけ「⑤他者と協力する態度」や「④コミュニケーションを行う力」は最も高い評価をする生徒が半数前後みられた。総合学習や社会科の学習においてグループワークを実施したり、国語科の学習において作品の交流を行ったりするなかで、生徒同士がコミュニケーションをとりながら協力して課題解決に向かうことができたといえる。

また、「⑥つながりを尊重する態度」についても半数に近い生徒が最も高い評価をしている。これは、学習において、協力して進めたという中学生同士のつながりだけでなく、野外調査で知り得た老上学区の歴史と各自のつながりや、老上学区のことを教わった講師や成果を発信した地域住民とのつながり（図2）、未来像を提案する際の対象となる未来の老上学区の住民とのつながりなど、社会とのつながりを意識できるようになった成果といえる。

さらに、「⑦進んで参加する態度」についても3分の1以上の生徒が最も高い評価をしている。総合学習（図3）、国語科（図4）、社会科（図5）のそれぞれの成

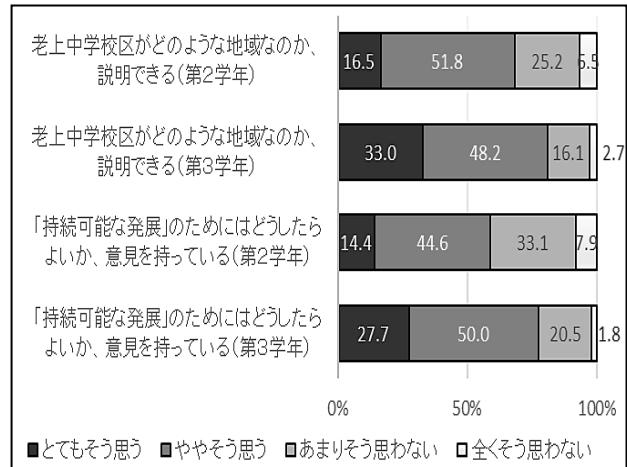
果物からもわかるように、こうした学習に積極的に向き合うことにより、老上学区の文化に誇りを持とうとする態度を育む中で、地元愛の醸成を図ることができた。

ただし、「①批判的に考える力」、「②未来像を予測して計画を立てる力」、「③多面的、総合的に考える力」といった能力面については、項目全体の中で比較的低かった。生徒作品例（図3）では、「十年後に残したい風景」として老上学区の魅力や良さを挙げ、スライドで発信しようとしている点において、「ORプロジェクト」の意図に沿っている。しかし、「未来像を想像して」「多面的、総合的に考える際には、学区の魅力や良さを生かした行動を伴う必要がある。「大きな銀杏の木の公園」であれば、この銀杏を生かして観光資源にしたり、住民交流のイベントを開催したりといったアイデアを出し、検討する必要がある。生徒が挙げた作品は、上述のように動画やパンフレット、ポスター、かるた作りであり、学区の魅力や良さを発信するという段階に留まるものが多かった。そのために、生徒それぞれが情報を発信したり、相互の意見交流や対立が生じにくかったりして、「批判的に考える」場面も少なかったといえる。

（2）社会科におけるアンケート

総合学習の調査において生徒の有用感が比較的低かった能力面のうち、「②未来像を予測して計画を立てる力」の改善に向けて、社会科で独自に実施したアンケートを重ねて分析する（図7）。社会科では、第3学年が第2学年時の時点と同じアンケートを探っている。このアンケートは4件法で実施しているため、上述の総合学習アンケートと単純な比較はできないが、向上した点は1年間の社会科学習の成果だと捉えられる。ここでは、「老上学区がどのような地域なのか説明できる」の項目が上がったことから、老上学区の魅力や良さを捉えるようになったことがわかる。また、「持続可能な開発のためにはどうしたらよいか、意見を持っている」といった項目において、肯定的な評価が増えしており、社会科として取り組んだ「老上学区の未来をよりよくするための提案」等の実践の成果といえる。

以上から分析すると、社会科で考えさせた「老上学区の未来をよりよくするための提案」の学習を総合学習で活かし、総合学習における「よさや魅力を次世代につなげるために今自分にできること」が魅力や良さの伝聞ではなく、魅力や良さを活用した振興策を考え



2024年2月(n=139)及び2025年2月(n=112)実施、対象は一部担当者クラスに限られる。本校作成。

図7 第3学年の社会科学習において生徒が身に付いたと実感している能力・態度

させるような学習にすれば、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力も向上する可能性が予見できる。

5 おわりに

本校では令和6年度、持続可能な開発を主題として探究的学習を基軸とする総合学習のカリキュラム、及び教科の学習も関連させるカリキュラムを設定し、実践した。第3学年の実践成果を踏まえると、持続可能な開発についての学習で重視される資質・能力についてその多くは総合学習により身に付けられていることがわかった。また、教科の学習との関連があれば、特に批判的に考える力や多面的、総合的に考える力等をより育てる可能性があることもわかった。

今後も引き続き持続可能な開発をテーマとした総合学習を進めていく。そこでは、七つの資質・能力の育成を意図すること、単元の系統性を持たせること、教科との往還を増やしてカリキュラムの連携を強化することを意識して、学習の効果を高めていきたい。

参考資料

- 1) 草津市教育委員会事務局学校教育課「スクールESDくさつプロジェクト」、<https://www.city.kusatsu.shiga.jp/kosodate/hoikukyoiku/shochugakkou/20230620.html>、2025年10月16日最終閲覧)
- 2) 国立教育政策研究所（2012）「学校における持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究（最終報告書）」

執筆責任者 七里 広志